

「臨床検査診断学」

編 集

山 中 學 東京大学教授
熊 原 雄 一 大阪大学教授

大阪大学教授

阿 部 裕

第二次大戦後、物理化学、生化学の著しい進歩の成果が臨床医学に導入され、客観的な検査にもとづく、診断のための手段・施設として、各病院に臨床検査部がスタートした。

しかし、当初はこの検査部の利用者である臨床各科との連絡が十分でなく、常に正当に評価されていたとはいえず、現在なおこの傾向は残存しているといつてよい。

これは臨床各科との相互理解の不足によるところが大部分であるが、検査部所属の医師が検査技術の検討、成績の単純な解釈に追われ、病態生理をふまえた検査法の選択、成績の解釈と診断のプロセスについての理論的解析についてのアプローチが少なかったためとも思われる。

評者も阪大中検在職時より、この点につき留意し、診断過程の客観化、論理化についての研究に着手し、現在もこれを続けている。

また、検査部創設時には柴田進教授のごとく“臨床生化学診断法”の

名著を書かれた方もおられる。しかし、一般的な広さで臨床検査診断学を体系的に学生に講義するための教科書はみあたらず、大学病院において教育にたずさわるものの悩みとなっていた。

このたび、東大・山中学、阪大・熊原雄一両教授により企画、編集され、医学書院より刊行された“臨床検査診断学”(B5版、650頁)は、まさにこの悩みを解消し、わが国の臨床検査診断学のスタンダードを築いたものといえる。

本書は本文586頁、付文32頁、文献7頁、索引32頁より成り、臨床検査部と臨床各科の双方にかかわりが深く、かつ研究面でも活躍されている58氏による分担執筆である。

まず、病態生理と検査の項では、検査法の背景となるもの、病態生理と検査の関連がとり挙げられ、各疾患の際行なわれるべき検査が必然性

をもって解説されている。病態生理は各執筆者により手ぎわよく、簡明に、図・表をもとにして、検査成績と関連して述べられ、従来の診断学、検査法の教科書とは味わいを異にしている。

つぎに、主訴、症状から検査への項は、従来の診断学の内容にかなり近いが、図・表・枝わかれ図によって、検査の進め方、鑑別診断が述べられており、きわめて理解し易い。

さらに、簡易検査法、緊急検査法が注意点とともに述べられ、正常値一覧表と学生向け参考文献が付されている。通読すると、分担執筆であるにもかかわらず、編者が執筆者に書き直しを求めた成果がよくあらわれ、全体はきわめてよい統一を保っている。編者の企画と編集の労を多としたい。また新しい事項のみを追わず古典的に重要な事項にも注意が払われている。希望点を述べれば、正常値についての推計学的な考え方や誤差論についての解説が加わることが望ましい。

しかし、本書の内容をマスターすれば、臨床医として極めて高いレベルにあることは疑いなく、わが国の臨床検査学に記念すべき著書が生まれたことを心から喜びたい。

B5、頁650、図282、表347、写真3
1976 年 ¥7,500 円 ¥300 医学書院刊